

ピニャータの作り方



用意するもの

新聞紙、泡立て、お玉、小麦粉、刷毛、糊、鋏、ホチキス、パペルデチノ又は御花紙(特に黒は大目に)、セロハン、モール、金銀の工作用紙、白表紙(板目表紙)または厚紙、障子紙または書道半紙、ナイロン荷造り紐

(20cm 位あったほうが良い)、風船(25センチ以上なるべく大きく球形に膨らむもの)またはビーチボール
たらい(35センチ以上広口のもの)、貼り付け用テープ類

当日いるもの

脚立2脚(折りたたみ高さ2M以上)、ロープ(長さ3メートル以上しっかりしたもの)、モールや紙で派手に飾った竹の棒

(1) 風船(真球形のものを推奨)またはビーチボールを膨らませる



(2) 小麦粉をてんぷらを揚げるくらいに水溶き(推奨)または障子のりを4倍に延ばす。小麦粉2:水3くらいの割が理想。粘りを出すために砂糖や塩を少量加える場合もある。小麦粉をお玉ですくい、泡立てを叩きながら水に投入し、さっくり混ぜ合わせる。

(3) 古新聞を張って張子を作る。吹き込み口周辺だけ残して、たらいに浸した新聞紙をまず1層貼り



十文字にナイロン紐で紐掛けをして、乾燥させて(推奨)その上からさらに2~3層貼るようになる。

後で黄色など明るい色の紙を貼り重ねると、下地の新聞の文字が浮きやすいので、黒っぽいものを先にはるか、障子紙を何枚か貼り重ねる。



大きなものを作る場合は美観のために吹き込み口の周囲を白表紙(厚紙)から切り出した帯で囲い(→(7)参照)貼り進める。

(4) 創意工夫で装飾する(大内人形とかふくとか柳井の金魚ちょうちんとか何でもOK)
特に御花紙を用いる際は刷毛塗りの上に貼り重ねるよりも、広口のたらいに張った溶液に両手で3~5枚重ねた紙を広げたまま垂らして漬けて、本体の傍まで持っていき貼るほうが効率がよくきれいに仕上がります。(ただし特に薄いタイプの御花紙では刷毛塗もやむをえません。)

7~8枚重ねた紙を屏風畳みにして中央をゴムやステープル針でとめて広げてくす球用の花を作ることができます。

メキシコで一般的なのは

1) 4センチ幅くらいのパペルデチノ(クレープペーパー)の帯を紙の繊維に垂直に半分に2回折り、

折り目の側から等間隔に切込みを入れたものを、とぐろを巻くように吹き込み口の反対から粘り強く貼っていく。御花紙でも2枚重ねれば代用可能。



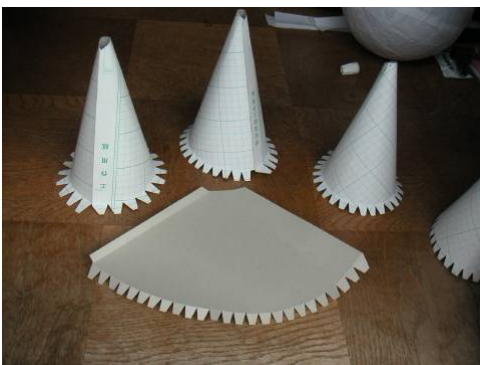
2) 4つ切り位の上記の紙をかぶせるように貼って髪の毛にし、蒲鉾型に切った黒い紙で目をつくり、筒状に巻いた紙を体・腕・脚としてぶら下げ完成。



3) セロハン紙で包み、両端を絞り巨大な飴玉を作り、おしまい



4) エストレージャ（星）。新聞を貼って金銀の紙で作った6個の角を互いに対称にならないように貼り



（つまり上3つを上から見て三角形になるように付けて、残り3つを逆三角形に付け）、紐付けをして、間を1)の帯で埋める。



(注) メキシコではこの角は7つの大罪([ピニャータの起源](#)参照)を表すとされるので7個付けます。

(5) 乾燥のため一晩置く。



(6) 吹き口に箸や針を刺し風船を割る。又はビーチボールを引き抜く。

(7) お菓子投入口を作る。白表紙の筒を付けても、丸く綺麗に切り整えるだけでもOK





(8) 当日破壊前に中身（お菓子・人形など）を詰める。
箱入りのお菓子やグミが底になるように先に詰め、後で入れる半分より上はおかきや飴玉・うまか棒にします。
お菓子の種類が多いほうが拾う楽しみが増えます。



(9) 高い脚立を2脚出し、ロープの両端を別の人が持ち、掛け渡す。ピニャータを外れずほどけやすいように吊るす。

(10) [ピニャータの歌](#)を歌う輪の中で、下から竹の棒で叩き、ロープ係は振り回して妨害する。
(対抗戦もできますね)
メキシコで一般的なのは[3回歌う間にチャレンジ](#)し、割れなかったら次の人に代わる方法。
ロープは人が持たずに固定して、その代わり割るほうは目隠しをして割る。
周りの人は「アリバ（もっと上だ）」などと教えてあげる。

解説者／びえひいと

[参照：ピニャータの唄](#)

東京で行われているピニャータの作り方



(上述した作り方は、フィエスタメヒカナ大阪実行委員会が行っている作り方を参考にしたものです。

メキシコ本国では土壺を使いますから強度に問題はないのですが、日本国内でやる場合は土壺の破片で子供が怪我をする危険を回避するために紙の張子で作る場合が殆どです。残念ながら、乾燥が十分でなかったり、薄すぎたりで、きちんと破れずに凹んでしまう失敗作もできてしまいます。

多少材料費は増えますが、丈夫に作っておいて壊れやすい部分を設ければ解決できます。以下はその方法です。)

参照：ピニャータの作り方（山田俊彦氏撮影）

1) 割る人の力に応じて新聞紙・障子紙の枚数を加減する

2) 糊を多めにし各層よく乾燥してから次を張ると硬くなって凹まずに壊れる

(大阪でも最初に新聞紙までの下地(山口では爆弾作りと称してました)を量産して、あらかじめ物干しを用意して竿に吊り下げて一週間以上乾燥しています。

大阪では熟練者(?)ほど、澱粉糊ではなく、パリッと仕上り易い小麦粉を愛用しています。)

3) 割りたい位置にカッターナイフで傷をつけておく

このときビーチボールを引き抜かず空気抜いてしぼませ、4～6箇所切れ目を入れて再度膨らませると、作業性が良い。

4) 発泡スチロールの半球(くす球用)が入手できれば簡単です

芯にはビーチボールを用いれば、歪みがありません。

5) パペルデチノ特有のカールした縮みを生かすためにスプーンを用いる。



(メキシコでは胴体が素焼きの壺で、竹ひごなどで動物の頭や足を作って自由自在に創作しますが、

大阪では怪我を防ぐために、本体が張子で、ダンボールや厚紙を用いて頭や足を作っています。

東京ではまれにバルーンアート用のハート型や動物型の風船を芯にして製作するそうです。)

解説者／山田俊彦氏

ただし、()内の注釈はびえひいと

山田俊彦氏の作品はコララテさんのサイトの[カフェ・メヒコ](#)内に常設の写真展にてご覧ください。